

13. Res-O-Mat T₃ Micro Test の使用経験

○窪田 昭男 分校 久志

久田 欣一

(金大・核)

本法は direct saturation analysis によって TBG のホルモン不飽和度を測り、間接的にサイロキシン濃度を知る方法である。今回はそのキットの基礎的検討を行なったので報告する。(1)再現性：アッセイ内の再現性は、甲状腺機能低下症・正常・亢進症それぞれの血清で変動変数 2.87%, 2.91%, 5.27% とかなり良好であった。アッセイ間の再現性も変動変数 3.37% と良好であった。

(2) インキュベーション時間の影響を見ると 30 分以内と 40 分以後がやや差があり、40 分以後の方が安定していると思われた。

(3) インキュベーション温度の影響に関しては室温では安定していた。

(4) トリオソルブとの相関を見ると、相関係数は -0.92 と全体にかなり良好であった。しかし、甲状腺機能亢進症血清においてやや低目に出る傾向が見られた。

本法の特徴は血清量が 50 μ l と少ないこと、インキュベーション時間が 30~40 分と短いこと、レゾマット T₃ 溶液に ¹²⁵I を使っていること、操作法が簡単であること、アッセイ間の再現性がよいこと等である。したがってもう少し基礎的検討と臨床的検討を加えれば臨床的に有益な検査法となろう。

14. RISA による Plasma volume 測定上の問題点

山口 宏 林 大三郎

(名大・放部)

斎藤 宏

(同・放)

当院では、通常 RISA 注入後 30 分の採血で血漿量を求めています。が、⁵⁹Fe および ⁵¹Cn による血漿量と比較して、RISA による血漿量の方が多く算出される傾向にあり、測定上の問題点につ

いて検討しました。

RISA にフリーの ¹³¹I が存在するかどうかを、レジンストリップおよびセファデックス G-25 を使って実験しましたが、完全にフリーの状態では ¹³¹I が存在するとは考え難く、他の方法によりさらに検討を要すると思われます。

実際の検査において、RISA 注入後 10, 20, 30 分に採血してみると、症例が十分とはいえませんが、30 分以内でも時間とともに血漿中 ¹³¹I の濃度はかなり低下しました。

10, 20, 30 分の三点を結び 0 分に外挿し、0 分のカウントに対する 30 分のカウントをみてみますと、5~20% も減少し、この値が血漿量の算出にそのまま影響していることがわかりました。

同一製品でも患者により、あるいは検定日から経過日数等により、血漿中の RISA 消失率がかなり異なるので血漿量を正確に求めるには、最低 3 回の採血が必要と思われます。

15. 胃切除例における消化吸収能

斎藤 宏

(名大・放)

山崎 直男 服部 竜夫

(同・外)

放射性トリオレインの消化吸収能を胃癌手術の前後で血中および、糞便中の放射活性で測定した。また、ビタミン B¹² の吸収は ⁵⁷Co-B₁₂ を用い、シリング法で、鉄の吸収は ⁵⁹Fe (Fe SO₄ 4 mg Fe キャリヤー) で全身計数法により測定した。(B₁₂ と鉄は術後の成績のみ)。

トリオレインの消化吸収能は 5 例の正常人で、血中濃度、平均 10% 以上、大便中 5% 以下 (3 日間) であった。

胃癌患者 7 名の術前値も 12.2% (血中最高値) と正常であったが、同一患者の胃全摘または亜全摘の 1 週間後 9.8%, 2 週間後 リパーゼ 投与により 12.2% 4 週間後 11.0% であった。大便中の値は精度がわるかった。

B₁₂ は術後の値のみながら、正常平均 8% % 以